

サマリートーク

是永 論

道具としての言語＝言語としての道具

つい先ほどの討論の中で、井上先生のおっしゃったことは、そのまま社会情報学のあり方にも言及していたので、それをサマリートークにさせていただくと、私がここでわかりにくい話をするよりはいいような気がしましたが、もし、というより十分その可能性をもつわけですが、このトークが失敗した場合は、実はそのような射程を示したかったので、という保険をかけてははじめさせていたきたいと思います。まず、私の専門分野から申し上げますと、いちおうメディア・コミュニケーションの社会学的な分析というものをやっております、メディア利用の社会的な動向、特にテレビの視聴や電子メールといったものを対象に研究をしています。

したがって、今回先生方が上げられていたテーマのうち、特に言語プロパーの問題については全くの素人でありまして、逆にその立場として勝手なことを言えばいいかとも思いましたが、今回のお話をうかがっております、やはり言語というものに対して、無関心をきどることはできない、という感を強めました。それはなぜか、ということをお話することで、ここでのサマリートークとさせていただきたいと思います。とはいえ、もとより力不足であることは否めず、個人的な感想の域を出ないかとは思いますが、その点あらかじめご了承くださいと思います。

この話はそのまま原稿になるということで、すでにタイトルをつけているのですが、



是永 論氏

それは「道具としての言語＝言語としての道具」というものであります。タイトルだけでは、後ろにひっくりかえしたものをつけただけで、すでに「道具としての言語」としては川上先生のお話からいろいろな論点が出てきて、そのまま乗ったようにも見える（実はそれもかなりありますが）芸のないものですが、まずはこの「道具」と「言語」の関わりについて考えることで、導入としたいと思います。

それは結局、自然言語に始まり、人間に利用可能なほとんどのメディアは、道具という側面をもっているのではないか、という点です。道具であるということには二つの性質がとりあえず想定できます。まず身体の外に存在するモノであるということで、言語はひとまず音であり、インクのしみであり、テレビは光であったりします。これは今さら詳しく言うことでもないかと思えます。もう一つは、石川先生がおっしゃった汎用性という言葉が流用させていただきますが、いろいろな用途に用いられる、つまり「使える」もので

ある、ということだと思います。同じく先生の定義では、道具に対する機械という対比がなされていましたが、これを言語に即して言うかどうかわかりませんが、道具でないもの、つまり特定の目的について決まり切った機能しか持たないものを普通われわれは言語と呼びません。巷で見た本のタイトルに「道具としての英会話」というものがありました。この本に書いてあったのは「英語」とは、たかが道具であり、「使えればいい」わけで、何で文法とかややこしいものを覚えなければいけないのか、ということでしたが、これは逆に言えば、受験英語などに典型的な場合ですが、いくら多大な労力を費やして単語帳を覚えたとしても、結局解答用紙に書き込む以外に「使える」ことがなければ、それは「英語」にはならないということで、この側面を言い当てているような気がします。

道具の多様性

ひとまずこのような関係付けをした上で、道具そのものの社会的なあり方について見ることで、この二面性について考えてみたいと思います。ここで石川先生のお話が出てくるのですが、コンピュータを情報メディアであると先に位置づけてしまうとトートロジーになってしまうので、単に冷蔵庫や電子レンジといったテクノロジー(=道具)に準ずるものとして考えたいと思います。

コンピュータに関する一連の話に見られたのは、社会におけるテクノロジーというもののひどくいびつなあり方であったと思います。それはある意味で利益性といった意図的な操作の結果として見ることもできますし、それを強く意識すべきことはあらためて指摘されることですが、その一方で、技術がもたらす社会的な効果が全く意図せざる結果(これは意識して社会学用語に引きつけているのですが)をもつという事例として見ることもできると思います。ここで「意図せざる」

というのは、単に道具がある目的にかなわないという事態を示すのではなく、逆に全く目的にかなわないと思っていたものが道具として成立するという場合も含まれます。興味深いのはここに先に述べた道具の二面性が現れているということです。つまり、ある状況において「使えない」道具というのは、それが所詮は機械である、つまり全くのモノでしかないという、非常にシビアな側面を見せつけるのであり、それは同時に使おうとする側の人間というあり方を排除するという一方で、人をモノのようにしてしまうという効果を持っているとも言えます。しかし逆にそれが道具として「使える」可能性をひとたび持てば、まさに自分の身体の一部と化すような場合もあるわけです。

ここからは私の見解になると思いますが、しかしながら、このような道具のあり方は、それが単にモノでしかないか、有益な道具であるか、ということはいくまでそれを「使った」結果からしか事後的に言えないのであって、最初から所詮モノはモノでしかない(機械は機械でしかない)、あるいはそれが万能な道具である、という一方的な言い方は、少なくともそれが社会で実際に「使われている」場面を考えると難しいのではないかと、ということですが、先に言ったように意図せずに「使ってしまう」・「使えない」という事態を完全に否定はできないわけですから。

討論の時にも少し申しましたが、ここで問題なのは「使う」ことの多様性を隠蔽する力なのではないかと思えます。逆に「誰にでも使える」という安易な想定もまた、その隠蔽に裏打ちされていると言えるのではないのでしょうか。なぜそのようになるのか、ということについて理由付けをすることは難しいのですが、少なくとも社会で実際に使われている場面と独立して技術があるように安易に想定するというのは、結局、社会でそれが実際に使われている場面がほとんど省みられてい

ないことを意味している、ということだけは言えるかも知れません。

しかしながら、こう考えると、インターフェースというものは、どこまでがモノにより、どこまでが人によるのか、ということもなかなか言いにくいわけで、そもそも「使う」という主体は誰であり、「使える」ということはどのようなことなのか、ということまでも問題にしてしまうわけで、私の言うことはむしろ退行しているのかも知れません。

話を元に戻しますと、道具のあり方というのはその使い方・使う場面から切り離して考えることはできない、ということが結局どのような意味を持つかと言えば、それはモノの側から言えば、あらゆるモノが何らかの意味を持つという可能性を否定できない、ということになるかと思えます。これは社会学者の佐藤健二という人がモノのメディア性ということを書いてまして、それからの連想に過ぎないかも知れませんが、例えば単なるハンバーガーでも、社会的に何かの意味を持つという場合があるということで、それはマクドナルドであるとか、といった意味ももちろんありますが、結局ハンバーガー（というものの食べ方）が、携帯性とそれによる移動性をもつといったことがあるわけで、それはやはり食卓という固定した空間でパンとハンバーグを食べるというものとは違う意味をもち、都市空間で、見知らぬ人同士が同じハンバーガーを食べているところを見せ合うという、いわばハンバーガーの使い方がそれをもたらすわけで、それが単に携帯性に帰するのであれば、おにぎりでも同じ意味が成立するはずですが、実はそうではない。その一方で、ハンバーガーが成立するためには、牛肉から包装紙にいたるまで、実はそれを道具だてるさまざまなテクノロジーに裏打ちされているという側面があるわけです。これをハンバーガーと考えずに、携帯電話で考えれば、もっと分かりやすくなるかも知れませんが、むしろ

ハンバーガーでも同じ様なことが言えるということが重要なわけです。

そこで、一見こじつけに見える「言語としての道具」というタイトルが意味をもつわけで、われわれは何かを道具として「使う」わけですが、それはあるモノに意味を持たせる・あるモノのメディア性を照らし出すという点で、ある種の言語行為を行なっているとも言えるのではないかと、ということです。このことは同時に、言語＝意味というものと、道具＝使うという行為の間において、どちらが先行していると、言うことは難しいのではないかと、ということの意味しているつもりです。

言語の多様性

それで言語について申し上げますと、阿部先生の議論で、ハードウェアとソフトウェアという話が出たと思うのですが、まず言語に関するふるまいを見ることがある、という立場は、単に認知心理学の方法としてあるというよりも、むしろ言語を考える場合において、単なる物理的な側面を見ることでは説明の出来ない＝つまり単に言語はモノに過ぎないと言ったことができないように、まさに実際の使われ方というものを切り離してはあり得ない、ということを実証しているように思われます。

自然言語を道具という視点で見た場合、それは非常に多様な「使い方」のできるものであるということが、さまざまな事例から示されたと思います。何万語もある中から瞬時に特定したり、同じ形態のものでもさまざまな状況にフィットさせて使用することができるわけです。もちろん、先生の議論では言語自体がそのようなものがある、といったことをおっしゃっていたわけではなく、そのように使うためのシステム＝こころがあり、そのこころのあり方についてさまざまなモデルを述べられたのであって、ここでまた、言語そのもの

にそのようなしくみがあるような言い方をするのはやはり不適当かも知れません。しかし、言語がその使用と切り離せないという問題と、そのしくみをどの外部的なシステムに帰属させるか、という問題は別のものであるという見方を、むしろそれが簡単には個別なシステムとして部分化できないとおっしゃられたような記憶もありますから、敢えて素人の立場からここではそのようなことをしてしまっているのですが、別に私は言語相対性のような、言語が確固たる実体としてそのようなシステムを内在すると主張しているわけではなく、言語が多様な使用の中にあること、それ以上もそれ以下も特に考えていません。

あくまで個人的な感想であることを確認しつつ、アナロジーとして言語と道具をくっつけたら何が言えそうか、として、話を続けさせていただければ、私がやはり問題にしたいのは、道具の時に見られたものと全く同様な、言語の多様性を縮減する力であり、それがまさに言葉という根源性をもって人間のあり方を規定してしまうということの恐ろしさだと思います。最も分かりやすいのが文字の使用であり、文字というのは社会的な財として利用を制限・あるいは強制することで、実際にさまざまな社会の階層関係を規定することを可能にしたわけです。しかしながら、ここで使用という点を強調するために敢えて面倒なことを言いますと、例えばわれわれは、「女性」や「母親」というように、カテゴリーという使い方をしながら、ある人を指示するということをします。対象や、概念、主体といった話とはべつに、あくまでその場面で「ある人をカテゴライズしている＝カテゴリー化」を行なうということで、言語をそのように使われている道具として見るのであれば、その道具は一つの指示においてさまざまな関係を生み出すことができる、という用途をもつわけです。例えば「母親」というカテゴリーを使えば、「子」という親子の関係や、「父親」と

いう夫婦の関係を指示することが同時にできてしまうわけです。あくまで使用という意味で、「母親」というカテゴリー化は実に多様な機能を持っているわけですが、しかし、実際には何か一般的なものとして「母親」というものが常に客観的に存在して、例えば全ての女性に対して、母性という形で、「母親」としての資格を期待してしまうような社会的なふるまいが行われてしまうわけです。これは、すべての人がパソコンを使えるという事態を強制的に想定することで、その使用の多様性を縮減することに等しい、といっちはあまりに強引かも知れませんが、こうした場合、「母親」というカテゴリーはそれを指示される人には使えないモノに過ぎず、強制的に付与されることでその人をいわば「母親」というモノにしてしまうわけで、とにかく言葉を道具としてみて、「使われている道具」があくまで道具であること以上に意味をもってしまうということの問題として、考えることは例えばできないでしょうか。

道具としてのメディア

こうした上で、あらためてパソコンというものへの社会的なあり方をメディアへの視点として位置づけるならば、そのあり方は、メディアが社会においても多様性の縮減をも意味しているのではないかと考えられるわけです。

それは一つ、あるメディアがメディアとして特権化することで、そのメディアを利用する誰に対しても、常に何らかの効果を与えるということが、まことしやかに語られるということで、例えば私がテレビの研究にたずさわる中で受けた印象としては、それがテレビである、ということが特性としてあまりに大きく、単純に言えばテレビを見るだけで暴力的になるという話が古い文献には散見されましたが、ごく日常的にテレビを使ってきたものとしては非常に奇異に映りました。自分は

別にテレビの情報をすべて逐一受け取っているわけではなく、ある時は時計代わりで、ある時は何かをしながらただつけている、というさまざまなスタイルの使い方をしていて、だからといってそこではテレビを全く「見て」いないか、といえばそうも言えないわけです。パソコンは一見もっと自由なあり方をしているように見えるわけですが、やはりその技術を見る視点としては同じことをくりかえしているような気がします。

その一方でメディア研究において、それが社会において道具としてどのような「使われ方」をしているか、使われている場面を見ていこう、という視点は、社会学そのものからというよりは、私の知る限りではコンピュー

タを使った共同作業（CSCW）などの分野で改めて強い問題意識として現れていると見受けました。実際にそこではエスノグラフィーという方法がとられており、あらためて社会を見るという視点の重要性を思いました。

それと同時に、今までメディアではないと思われていたものがメディアとして使われるようになる、ということが社会的により顕在化しているわけで、あらためてメディアを「使うモノ」、つまり道具として見るということの意義を、言語＝道具という視点にかえて検討する必要があるのではないか、ということを書いて、結局最後まで勝手な話になってしまいましたが、終わらせていただきたいと思います。